

【中国語】

中国語で発信しよう

■大学で中国語を学ぶということ

日常生活の中で中国語や中国人と接することが、今や誰にとっても実に多い。先日も、高尾山に行ったゼミの学生が中国人観光客の多さに驚いていた。筆者も、スポーツクラブのサウナでよく一緒になる中国の人が、かつて留学した復旦大学の卒業生であることが偶然にも判明し、あの時代の上海を知る者同士、親しくしている。小・中・高時代にクラスや部活で中国系の友人がいたという人も少なくないだろう。そうでなくても、さまざまなメディアで中国関係のニュースや街ネタ（時にはトンデモ話も！）が日々流れているし、外に出ると駅や街角でへんな略字の漢字の案内板を目にし、ドンキや家電量販店では中国語でのアナウンスを耳にする。電車に乗れば中国語の会話も聞こえてくる。そして、中国、台湾からの留学生が多い一橋のキャンパスを歩いていて、中国語を耳にしない日はない。

こんな風に中国語、中国人が身近な存在になっている。だが、その社会や国について私達が持つイメージは、むしろ単純な、画一化されたものになってしまっていないだろうか。そして、現地に行かなくても、多くの人は、それで中国のことが解ったような気になっているのでは？

周知のことではあるけれど、良い意味でも悪い意味でも、中国は国際的にますます大きな影響力を持っている。その動向を把握し、解りにくい動き方の背景を多面的に考えることは、我々がさまざまな場面で意思決定を行う際にますます重要になっている。そんな時代にあって、こうした現状のままでよいのだろうか。

一橋大学でこれから学ぶ諸君には、我々は次のような期待をしている。それは、**誰かが選んで翻訳した情報**からだけでなく、現場の情報に自らアクセスした上で、現在問題になっているさまざまな現象についての的確な分析ができるようになる、ということだ。

中国についても、自分の目で実際に中国を見て、そして中国の人々と語り合い、中国語で書かれたものを読んで理解をして欲しい。政府と民衆は一枚岩ではない。現在の中国では以前よりもかなり「自由」に、さまざまな立場の人々が自らの思いや考え、意見を社会に向けて発信している。そうしたものに接することによって、中国の持つ豊かな多様性を認識することができ、簡単に理解できないがゆえの面白さに気付くはずだ。日本語や英語

の情報のみでは到達できない、一步踏み込んだ分析、思考を展開することができるだろう。

大学時代の自由な時間(←卒業した先輩たちは必ずこういう)を使って、こうしたことができるレベルを目指して、中国語を学んでみよう。中国語は、身近に学習機会があふれている。また、あの独特の発音も学習者のテンションを上げてくれる(と筆者は思っている…)。そして、比較的早い段階で辞書を引ながら文書を読めるようになるのでそれなりの達成感も味わえる。今年度からの105分(!)の授業時間も、口の周りの筋肉や喉は疲れるけれども、きっと楽しみながら過ごせるだろう。

■中国語は将来役に立つ?就職に有利?

とは言え、大学生の重大関心事の就活やその後のキャリアにおいて、中国語はどう役に立つのかが気になる、という声も聞こえてくる。チャイナリスクなどとも言われているが、それでも中国語の有用性は否定できない。中国語は、独語や仏語に比べて、実用語学として教育されてきた歴史もある。テレビニュースでも企業での中国語研修の様子が特集されたり、ビジネス誌でも英語と共に中国語学習が何度も特集されてきた。これは独仏語にはみられない現象だ。

ビジネスの第一線ともなると、英語と同様に、通訳を介するようなドンクサイことをしては、とてもやっていけない。こうしたイメージでの「役に立つ」ということであれば、しっかり勉強しなければ役立つレベルにはならない。これはどの言語も同じ。中学生程度の英語ではハワイ旅行ぐらいは出来ても、ビジネスの上ではどうだろう?何の役にも立たないだろう。4年間継続して上級まで勉強することが必要だし、短期留学、できれば1年間の長期留学もしておきたいところだ。現在は中国留学経験者もザラだし、企業も優秀な中国人留学生や中国本土で日本勤務の人材を採用するようになっている。履歴書に書くには最低中国語検定2級・HSK(TOEFLの中国語版)5級ぐらいはないとダメだ。

いやいや、随分とハードルの高い話になってしまった。だが、一橋を卒業した先輩のこんな話もある。彼は政府系の金融機関に勤務し、タイでの開発投資の担当をしている。先方とのビジネス上のやり取りは英語で行われているそうだ。そこで、「今の時代、ビジネスの世界は英語ができれば大丈夫なんだろう?」と彼に尋ねた。すると彼の答えは、なんと「そうであると言えるけれども、自分はタイ語の勉強を始めた」であった。彼は、上層の第一線とのビジネス交渉や契約は、英語でやりとりをしている。だが、プロジェクトの実際の現場の第一線で働く工場長のような人々と話をして、直接声を聞きたいのだという。

そこでは英語が通じないので、現地の言葉を学び始めたのである。すばらしい！ こうしたことは、中国においても同じだ。また、中国ビジネスでは非常に重要な宴会の席でも、日常会話程度でも現地の言葉ができれば、テーブルの雰囲気は和むし、自分の存在をアピールできる。ふとしたことから有用な情報を耳にすることもあるだろう。こうしたイメージでの「役立つ」ということであれば、ビジネスでの交渉事をまとめるほど高度なレベルは必要ない。大学でしっかりと基礎を身につけて、それを実際のコミュニケーションの中で磨きをかけてゆけば十分役に立つ。

目的や目標をはっきりさせることは何事においても大切だし、効率も大きく違ってくる。将来役に立てたいと思うのなら、どう役に立てたいのか具体的なところまで考えるとよい。なんとなく将来使えそう、という理由で始めると、入学当初はフレッシュな気持ちで頑張れるのだが、11月の一橋祭の頃には、漠然とした将来よりも今をラクにやっていきたいとか、今の部活やサークル活動を優先して…というような気持ちになる学生が出てくるのも例年のことだ。とりあえずはいろいろある検定試験を目標にするのもよいだろう。

■教養としての中国語—大学生生活を豊かにしよう

上では ビジネス＝実用 を目的の例としてあげたが、モチロンそれだけではない。中国語で三国演義や水滸伝を読もうというのも立派な目的だ。毛沢東は字を知らない兵士たちに1500字も覚えれば水滸伝を読めるようになると励ましたという。唐詩を中国語で朗読できるというのも素晴らしいことだ。

一橋にいと、captains of industryなんてヨイショされて舞い上がっているうちに下品な“^{ジャーナリスト・ビジネスマン}日本商人”に成り下がってしまうこともある。教養のない商人はつまらぬ成金かそのパシリだ。中国語は実用語学として扱われることが多かったが、その背景にある四千年の文化、刻々変わっている現代中国社会の理解への大切な手段でもある。教養の点から見ても独仏語に劣るところはない。とかくビジネス面ばかりに眼がむけられがちな現代中国だが、13億人の中には深い教養、洞察から発信しているジャーナリスト・思想家・文学者も多くいる。ノーベル賞をとった莫言を原語で読んでみようとは思わないか？

さる先生が退職される際に、昔の一橋生はどうせ就職がよくて時間はゆったり使えるし、卒業後は苛酷なビジネスの世界に身を置くことになるのだから、せめて在学中は幅広く教養を身につけたい、と行って専門以外の勉強にも力を入れたものだが、この頃はそういった学生がめっきり少なくなった、とお嘆きになっていたことがふと思い出される。教養(こ

れも古くなったか。でも無教養っていわれて喜ぶ奴はいない筈だ) っていうのはホンモノとニセモノの区別のそれは厳しいものだ。将来どんな道に進むにせよ、ちゃんとした知識と理解の基礎を身につけること、そして豊かな教養によって人格を育む一生の方向づけをすること、こういうそれこそ優雅なことに時間を使うというのは大学時代にしかできないことだ。

■中国語学習の実際

「中国語は易しいと周囲から聞いた」、「漢字を使うので易しそうと思った」という履修動機もよく耳にする。でも本当だろうか？

まずは、次の漢詩を音読して下さい。

春眠不覚曉 処処聞啼鳥 夜来風雨声 花落知多少

「やだな、これ孟浩然の春暁でしょ？教科書で習いましたよ、『シュンミン アカツキヲオボエズ …』」 ストップ！それは日本語。訓読は日本語だ。中国語で音読して下さい。

「えっ!？」 そう、漢字は原則的に表音文字ではない。すなわちいくら眺めていたところで正確な発音はわからない。ということは、つまり個々の漢字の発音をイチイチ覚えなければならぬということだ。ちなみに中国語の常用字は約2500字だ。中国語の勉強で一番難しいのはこの点かもしれない。漢字を見て、それを発音できるようになるのは相当な苦労だ。新聞や雑誌を見て、全部正確に発音できるとしたら、ホントにたいしたものだ。

さて、上の春暁の詩の読み方を記すと、次のようになる。

chūnmiánbùjuéxiǎo chùchùwéntíniǎo yèláifēngyǔshēng huāluòzhīduōshǎo

「なんですかこりゃ？ローマ字？中国語なのに？それに変な符号がついてる！」これはピンイン(拼音字母)という、いわば中国式ローマ字表記だ。これで発音を表記する。実はこれが一癖も二癖もあるのだけれど、それには今は触れない。ところで、中国語には声母(≒子音)が21、韻母(≒母音)が38あり、実際にはない組み合わせをさっ引いても、ざっと400もの音節がある。変な記号は声調記号というものだ。中国語には4つの声調がある。ご承知の諸君もいるかもしれないが、同じmaでも高く平らに発音すると「お母さん」となり、低く押さえ込んで発音すると「馬」という意味になる。「おねえさん、水餃子一杯いくら？」を声調を間違えたがために「おねえさん、一晩寝るのにいくらだい？」となってひっぱたかれることにもなる。で、先の400の4倍で単純に計算すると1600もの音節がある。これが中国語の発音が難しいと言われるゆえんだ。選択したらこれキッチリ発音しわけてもらい

ます。単語を覚えるにはこの声調を含めたピンインをしっかりと覚えてもらわないと始まらない。本当にこれはシンドイ。学年末にアンケートをとっても、一番大変なのは発音・ピンインだという。英単語を発音記号ごと覚えろという以上に残酷だという声もあったな。しかも、ピンインが分からなければ辞書も引けない。発音の分からない漢字に出くわすたび、漢和辞典を引くように、何の部首の何画という具合にいちいち発音を調べなければならぬ。けっこうストレスだ。今はスマホで字をなぞれば調べられる時代になって、大部ラクチンになっているけれど……。

ところで、さきほどの春暁の詩、今の中国では次のように書く。

春眠不觉晓 处处闻啼鸟 夜来风雨声 花落知多少

ところどころ見慣れない略字があるね？これを簡体字という。略字なんて軽く考えては困る。今では中国ではこちらが正式な字体なんだから、ちゃんと覚えてもらわないといけぬ。わたしたちなんぞはコリャ便利とホイホイ覚えたものだが、今の学生諸君にはこいつも一苦労らしい。ちなみに、

春眠不覺曉 處處聞啼鳥 夜來風雨聲 花落知多少

という字体の方は繁体字といい、台湾をはじめ、世界の華僑社会ではこちらの方が通用する。大陸でも繁体字の方がカッコイイって復活濫用され、あげくに政府が罰金を課して取り締まっていたりもする。インテリを自認し、将来、世界を飛び回る一橋生諸君は日本の常用字・簡体字・繁体字の3字体、これもキッチリ覚えて下さい。

「でも、漢字の意味は同じでしょ？ 上の詩でも意味わかります。」といわれれば、大勢としてはその通りといえよう。月は月だし、海は海。これは日本人が中国語を学習する上での最大のアドバンテージだ。しかし、フツー会話では月は“月亮”といい、海は“大海”という。上の詩にある春も“春天”というし、“闻”は現代語では「嗅ぐ」という意味だ。ここの「聞く」なら“听见”。“花”という字は“flower”の意味でももちろん使うけど、動詞“spend”としても常用される。“手紙”や“汽车”がトイレトペーパーや自動車であることはTVのクイズで知っているだろう？ 厄介なのは微妙にずれている場合だ。例えば“送”は中国語では直接そこまで持って行って渡す意味合いであって、郵便や宅急便で「おくる」ことには使わない。われわれ教師がアタリマエのような字でも辞書引け、辞書引けというのにはこういう理由がある。同じ漢字だからといってナメてかかっているわけではないのだ。なまじ同じ漢字を使うがための油断が怖い。ところで、次の漢字、見たことがありますか？ 意味が分かりますか？

跑 站 躺 挖 踢 蹲 踩 捏 扔 拿 摆 剪

走る・立つ・横になる・掘る・蹴る・しゃがむ・踏む・つまむ・投げる・持つ・並べる・切る、といった日常基本動作を表す動詞で、もちろんしょっちゅう使う。だから、新しく覚えなければならない漢字もけっこうたくさんある。

文法については、ちょっと、いやかなりヤッカイ。それは文法自体が複雑だっていうのではない、むしろ簡単な方だろう。ただ、みんなが知っている英文法から連想するような、かっちりとした、当てはめればピタリと分かるといった文法みたいなものは、中国語にはないということなのだ。英語ですらドイツ語の先生に言わせると曖昧きまりないそうだが、そんなものではない。文法っていえば、人称変化・格変化とか、時制のことなどを連想するのだろうが、そういったのは中国語にはまったくないといってよい。目的語だけ見てごらん。下の3つの文、いずれも英語で言えば第三文型 S+V+O の文。さあさあ、訳してみて。

①我 吃 饺子。 ②我 吃 大碗。 ③我 吃 食堂。 吃=eat

正解は、①は「私は餃子を食べる」、②は「私は井で食べる」、③は「私は食堂で食べる」なんと目的語の性質によって働きが変わってくるのだ。高名な心理学者のユングだったか誰だったか、中国語を勉強し始めてとうとう「中国語には文法がない！」とキレちゃったという伝説もある。こういった点はやはりある程度場数を踏んでもらうより仕方がない。陶淵明じゃないけれど、甚解を求めずに習うより慣れろ、理屈より実践の側面があるわけだ。君らの先輩たちに言わせると、曖昧だとか、例外ばかりだとか、個々の単語の使い方や言い回しばかりだということになる。とにかく辛抱強くつき合ってもらわなければならない。2年生以降、中級も履修しなければやっとうちには入らない。そのつもりでこちらも1年から教えるし、伝統ある一橋の中国語は1年次にフツの大学1年レベルは冬前に終わらせ、更に進んだところまでいく。

■一橋の中国語のカリキュラム概要

よしっ、それじゃそこいらをキッチリやってやろうじゃないの、という意欲のある君、そんな君の意欲に応えるのが我々のモットーだ。では、授業の実際を紹介しておこう。1年次は発音と文法の基礎固め。もちろん2年次以降も引き続き勉強することを前提にしたものだ。発音は口がくたびれてもやる。カラダで覚えてもらいましょう。積極的に勉強したい人のために、**中国語初級（総合）Ⅰ、Ⅱ**受講者にむけて、**中国語初級（実践）Ⅰ、Ⅱ**

という中国人教員によるオラル中心の授業も開講している。**中国語をモノにしようとして**いる人、**2年で中国語中級会話クラスを受講しようと考えている人には必修**といってもいい。秋深まり文法の基礎が終わる頃には、辞書を引き引き新聞や小説がソコソコ読めるようになり、面白くなってくる。ここからは経験を積む世界だ。辞書との格闘が始まる。

2年次は中級。1年間頑張ったのだから、ぜひ中級も履修してほしい。内容別に、読解力を養成するクラスと、中国人教員による会話・作文指導など実用面重視のクラスがある。後者は近年力を入れている分野で好評だが、1年でテキストに済ませていた者には厳しい。HSK(漢語水平考試=中国語版TOEFLみたいなもの)に特化したクラスも現在開講している。

3年次以降の上級では、さらに運用能力をのぼしたり、実用的な文献の読解スキルまで学べる。中国に興味を湧かせてしまい、如水会の留学制度などを利用し結局長期留学にハマるなんて先輩も、毎年誰かしら必ず出てくる。

■中国語で発信できるようになろう

いまや国民的ニュース解説者となった池上彰氏が日中相互理解不足の原因に「日本からの中国語による発信が少ない」ことを指摘していた。他にも木村太郎氏など、日本からの中国語による発信不足を指摘するジャーナリストや識者は多い。

しかし、そんな状況も若い世代では変わりつつある。中国語で発信して有名になっている日本人が次々と現れている。中国の人気トーク番組「世界青年説」では俳優の黒木真二さんが各国の出演者に交じって熱く語り、“TOKYO PANDA”サンは中国のwebでファッションリーダーとなり、山下智博さんはネット動画を毎日配信してカリスマ的人気を博している。かつて反日デモの際に「釣魚島是中国的，苍老师是世界的。(魚釣島は中国のもの、蒼井そらは世界のもの。)」というプラカードが出た蒼井そらさんに圧倒的な中国フォロワーがつくのも、中国語で発信の努力をしているからだ。将来的には、諸君にも、自分の好きなことや専門領域で、ぜひ中国語で発信できるようになって欲しいと思う。それは日中の草の根の相互理解へとつながり、また自らの世界も大きく広げてくれることは間違いない。

まあ、とりあえず中国語がどんなものか、NHK教育テレビの中国語講座を見てごらん。放送時間は火曜日夜11:25(再放送は木曜日朝6:00)から。ピンインがどんなものか、発音がどんなものか、ネイティブの発音がどんなにエネルギッシュで速いかなんて言うことも、百聞は一見に如かずだ。

また、インターネットには我々一橋大学中国語エリアのホームページもある。一度アクセスしてみてくださいませ。

それじゃ、4月に諸君と教室で会えるのを楽しみにしている。

★中国語圏からの帰国子女、準母語者、高校・他大学などで初級中国語(大学1年レベル、中検4級程度)を学習してきた人へ

中国語初級(総合)Ⅰ・Ⅱは初めて中国語を勉強する人を対象に講義をおこないます。

- ・選択しても優遇措置はない。他の初修の学生と同じく、bo po mo foからまたやることになる。退屈だろうと、毎回遅刻することなく出席し、居眠りせず受講しなければならない。
- ・中国語初級(総合)Ⅰ・Ⅱを履修中の者は中国語中級・上級は履修できない。
- ・中、上級中国語を受講してそれを中国語初級(総合)Ⅰ・Ⅱに振り替えるような措置はない。
- ・他の言語を選択すれば、初級中国語習得済みの人は、中国語中級・上級を1年生から履修して磨きをかけられる。中国語以外の新しい言語を初級語学で学んで視野をさらに広げることは、君の一生を豊かにするし、とても有意義なことだ。